

午後1時零分再開

○議長（浅尾静二君） 休憩前に引き続き会議を開き、一般質問を続行いたします。

次に、10番中島秀樹議員の質問を許可します。10番中島秀樹議員。

（10番中島秀樹君登壇）

○10番（中島秀樹君） ただいま質問の許可をいただきました10番議員の中島秀樹でございます。午後一番の眠い時間だと思いますが、どうぞおつき合いいただきたいというふうに思っております。

私は、このたび、今はやりの人口増加政策をテーマにもってきまして一般質問をするんですが、今のやり方を数十年続けたらどうなるかということを目測して、だから今こう変えようということ、この一般質問で議論をしたいというふうに考えております。

あとは、質問席から質問させていただきます。

（10番中島秀樹君降壇）

○議長（浅尾静二君） 10番中島秀樹議員。

○10番（中島秀樹君） では、通告に従いながら質問させていただきます。

先ほど登壇して申し上げましたけれども、今回、人口増加政策という1項目しか項目を上げておりませんので、私は一般質問の通告をするに当たりまして、ひょっとしたら時間が余って早く終わるんじゃないかということで、かなりの恐怖心がありました。

ですから、1時間、とにかく質問をもたせたいというのが私の気持ちですので、とにかく時間をもたせるためには情報量をたくさん入れないといけないということで、紀伊國屋に行きまして本をかなりの数買ってきまして、かなりの数読みました。今までの一般質問の中で一番読んだんじゃないかなというふうに思っております。

そういった中で、読んできたものの中である程度見えてくるものというのがございまして、いろんな考え方があります。人口減少、そんなに悪いことじゃないよという考え方もあれば、やっぱりこれは避けられないものだというような論調のものもあります。

その中で私が見えてきたもの、それから難しいテーマですからもちろん答えはないんですけども、こうしたらいいんじゃないかということ、これを一般質問をさせていただきたいというふうに思っております。

まず、私は最近こういう話をよく聞きます。求人を出しているんだけど、人がなかなか集まらなると、人が来ればもっと事業を大きくできるのに、人が集まらないんだという話を聞きます。

それから、企業誘致をしても、本当に企業が来ると言ったときに、朝倉市に人が集まるかどうか心配だとか、そこのところを見きわめて企業誘致のことは当たらないといけないとか、そういった話をよく耳にするようになりました。

私は人口減少と高齢化が起きる地域では、需要が減る前に、要するにサービスを提供する担い手、それが先に不足する。サービスで人手不足が生じているのではないかというふ

うに心配しております。

そして、私は、朝倉市は、将来的にはこのまま人口減少が緩やかなケース、それから普通のケース、それから非常に激しいケース、3ケースありましたけれども、普通のケース、それから激しいケースにおいては、供給不足が発生するのではないかというふうに心配しております。

アメリカの経済学者、ティボーという人が提唱した考え方に、足による投票という考え方があります。もし、実際に行われる政治や行政が自分の意見や望みと大きくかけ離れたとき、住民はより自分の意見や望みに近い政策が行われている地域に移り住むことができる。

要するに、朝倉市よりもここが好きだと、ですからそっちに移り住む、朝倉市よりもこっちが便利だ、だから自分は朝倉市には住まないでA市に住みますと、そういった考え方はです。私はこの足による投票で、将来、朝倉市が負けてしまうのではないかというふうに心配しております。

そして、日本は史上類を見ない超高齢化社会を迎えます。持続的な人口増加と経済の高度成長を前提とした20世紀後半の社会と都市の前提が大きく転換しています。そして、状況はだんだん厳しくなっています。

本当に困ったら、国が何とかしてくれるだろうという考え方は捨てるべきだというふうに思います。巨額の長期債務を抱えた国は、財政再建に中期的に取り組んでいかなければなりません。地方財政が今後さらに厳しくなった場合、地方交付税、交付金等による下支えもいずれ限界が訪れる。「自ら助くる者を助く」という発想に、既に国も転換しつつある。

とりわけ、自治体としての持続可能性は次の時代の再生能力を持つ若者、特に若年層の女性にかかっている。その世代が住み続けられる環境を整え、住み続けたいと思う施策を実行しなければならないと、この「地方消滅」、これは2014年に出た本なんですけれども、この続編の「地方消滅」の「創生戦略編」に書いてあります。

「自ら助くる者を助く」この発想が、私は必要ではないかというふうに思っております。

ただ、私は朝倉市の強みというのもあると思っております。地方創生は簡単に言いますと比較優位の競争、要するに有利なものを、他よりも有利なものを伸ばしていく、こういった競争だというふうに思っております。

そういった中で、朝倉市は福岡県の中にあり、福岡市のそばにあります。ですから、そのメリットを私は生かしていくべきだというふうに考えております。

総務省の住民基本台帳人口移動報告というものによれば、2014年の福岡市の転入超過数は約7,500人弱です。県内の市町村から約2,450人が来ております。そして九州他県から6,500人、中国・四国地方から900人が来ているそうです。

福岡市が福岡県内ではなく、九州全域及び中国・四国地方からの人口の受け皿となって

おります。いわゆる人口流動のダム役割をしております。

九州の中で、人口が増加傾向にあるのは福岡県のみです。今後も若い世代が福岡に集積するという状況は、ほとんど変わらないのではないかと考えております。

そういった朝倉市は福岡市のそばにありますので、私は生き残るために、やはり競争に打って出るべきだというふうに考えております。

自然体で成り行きに任せるとするのも簡単、楽かもしれませんが、ゼロサムゲーム、パイの奪い合いのゲーム、これは朝倉市かどこかがとったら、どこかが必ず減ります。

でも、この不毛な戦いに私は挑まないといけないのではないかと考えております。そうしないと、生き残れないのではないかと考えております。

そういった中で、私は朝倉市を福岡市の近郊にあるためにベッドタウンにしたらどうか、ベッドタウンの政策を打ち出したらどうかというふうに考えております。

この点についていかがお考えでしょうか、質問いたします。

○議長（浅尾静二君） 総合政策課長。

○総合政策課長（石井清治君） 朝倉市を福岡市のベッドタウンというところの考え方がないのかということですが、人口ビジョンの実現に当たりまして、本市が安定的な人口の構造が維持できるかというのは、確かに不安視がございます。

ことし3月に策定をいたしました総合戦略の中で、いろいろ多岐にわたって5項目ほどの目標値を設定しております。

議員言われますように、その中にはベッドタウン化という、実は表現をまだまだ持ち合わせておりません。

しかし、これは決して否定するものではございませんが、人口を維持もしくは減らさないためということで、まずは交通の利便性の向上、それから住環境への支援、さらには午前中出ておりました通学・通勤のための支援という形の中で、今、総合戦略の中の具体的な事例として取り組んでいるところでございます。

実際は、さらに住宅リフォーム、そういったところについても手がけているところでございます。以上です。

○議長（浅尾静二君） 10番中島秀樹議員。

○10番（中島秀樹君） 済みません、ちょっと聞き逃したかもしれないんですが、今、答弁の中に交通の利便性の向上という言葉が出たような気がしたんですが、この点については具体的に今どういったことをお考えでしょうか。

○議長（浅尾静二君） 総合政策課長。

○総合政策課長（石井清治君） 総合戦略の中に、「誰もが住みたい朝倉」という目標の基準がございます。

その中に、交通の利便性の向上ということで、博多駅直通電車の可能性調査、それからバス停待合所設置補助というところで、ここあたりが具体的な例になるかと思っております。以

上です。

○議長（浅尾静二君） 10番中島秀樹議員。

○10番（中島秀樹君） やはりベッドタウンになるのであれば、交通の利便性というのは、私は絶対大事だというふうに思っております。やはり、1時間ぐらいで天神、博多に着くような利便性というのは大事なのかなというふうに思っております。

そういった中で、まず直通電車、この前、蓄電池電車ですかね、DENCHAというのが新聞に載っているのを見ましたけれども、これにつきましてはかなり高いハードルがあって、なかなか実現は難しいんじゃないかというふうに思っております。

ですけれども、でもこれはやってほしいというふうに思っております。そうしないと、朝倉市の利便性が向上いたしませんので、そういった中でDENCHAを入れるに当たってどういった、今のところがハードルとなってあるのか、それをお尋ねしたいと思います。

○議長（浅尾静二君） 総務部長。

○総務部長（鶴田 浩君） JRの車両ということで、私どもの認識といたしましては蓄電池車というような言い方をしておるんですけれども、架線とといいますか、電線とといいますか、架線がないところも高出力で走れるというような電車なんですけれども、その、仮に甘鉄を走らせるとしましたところ、そういうレールの耐久性なり強度とかがあるか、それからやはり一定の蓄電、バッテリーを入れなければいけませんけれども、それを入れるための充電装置とか言いますけれども、そういうようなものができるかどうか、私どもは素人でございますので、そういうところを検討しておりますけれども、そういったものには多額の経費がかかるというものでございますので、そこも大きなハードルではなからうかというふうに思っております。

○議長（浅尾静二君） 10番中島秀樹議員。

○10番（中島秀樹君） 今、多額の経費というふうに出ましたけれども、具体的にはどれくらいというのはわかりますでしょうか。

○議長（浅尾静二君） 総務部長。

○総務部長（鶴田 浩君） 新聞報道でございますけれども、新聞報道によりますと1両が約2億円というようなこともありますけれども、果たしてそれでええかどうかというふうな精査したものではありません。新聞報道のみでございます。

○議長（浅尾静二君） 10番中島秀樹議員。

○10番（中島秀樹君） 1両につき2億円ということは、やはりかなり大きな金額だなあというのが率直な感想で思っております。

私はベッドタウンになるためには、やはり交通の利便性というのは絶対必要だというふうに思っております。

地方消滅の可能性都市ということで、朝倉市も残念ながら名前が上がったりしたこともあるわけなんですけれども、これの前提となっておりますのは2つのポイントがあります。

1つは、生まれてくる子どもの数よりも、亡くなる人の数が大幅に多くなる、これ自然減ですね、自然減があり、そして出生率が一定水準まで回復しても人口減はとまらないという、要するに自然減のほうが多いということ。

そして、もう一つが、地方から都市への人口移動が続く状態、つまり社会的な移動が終息しないということ、それをこの本は前提としております。

ですから、裏を返せば、人口移動の流れを穏やかにできれば、もしくは逆転することができれば、自治体消滅の汚名をそそぐことができると思いますか、そういったことができるんではないかというふうに思っております。

そういった意味で、福岡市のほうの働く場、それからこれはサービス産業とか、若い人たちが働いているのは、今、大半がサービス業ですので、そういったところへのアクセスがよければ、私は人口流出は防げるのではないかというふうに考えております。

私は2番目の項目ですけれども、朝倉市は交通のやっぱり要衝になっておかないといけないというふうに思っております。ベッドタウンであれば、交通の要衝になるべきであるというふうに思っております。

そうすれば、就労であったり、就学のために、若者が出て行くということを防ぐことができるのではないかというふうに考えております。

朝倉市は交通の要衝になっていますでしょうか、なり得るでしょうか、お尋ねします。

○議長（浅尾静二君） 防災交通課長。

○防災交通課長（草場千里君） 朝倉市と都市圏を結ぶ公共交通手段といたしましては、鉄道、バスなどがあります。

これにつきましては、1時間に2便から4便程度が運行されておりますので、甘木の中心市街地から都市圏へは1時間弱で着くというようなことを考えますと、ある一定、交通の要衝というところにはなっていると思っております。

○議長（浅尾静二君） 10番中島秀樹議員。

○10番（中島秀樹君） 交通の要衝になっているということですね。

ただ、もう少し私は利便性が向上してもいいんじゃないかなとも思っております。

私は嫌いな言葉に、昔よく言われたんですけど、「陸の孤島、甘木」とか、そういった言葉が昔ありました。そういうふうにはやはりなってほしくない、便利な朝倉市、サービスがいい朝倉市というふうになってもらいたいというふうに思っております。

私は甘木鉄道をよく利用するんですけども、行きときは結構スムーズに行くんですけど、帰りのときなんかは駅舎のほうで待ち時間が長かったり、それから駅舎で待っているときに非常に手持ち無沙汰といいますか、もうちょっとどうにかならないかなというようなことを思うんですけども、これについてはもう少し改良することはかないませんか、お尋ねします。

○議長（浅尾静二君） 防災交通課長。

○防災交通課長（草場千里君） 接続の関係でございますが、西鉄の小郡との接続、また、JRの基山駅での接続を考えて運行をされておるところでございます。

行きの分で、向こう、一番終点の基山駅まで届きまして、またこちらに帰ってくることを考えますと、どうしても行きを中心に考えておりますので、今度は帰りの分は若干待ち時間が出るということは、ちょっと改良が難しいところではないかというふうに思います。

○議長（浅尾静二君） 10番中島秀樹議員。

○10番（中島秀樹君） 私は、ちょっととっぴな考え方なんですけれども、鉄道会社というのはJR九州にしても、それから西日本鉄道にしても、鉄道やバス部門、運輸部門での収益というのは、ほとんど割合としては小さくて、今は不動産事業とか多角化をしております。

そういった意味で、甘木鉄道は朝倉市が株主ですので、甘木鉄道が、要するに運輸だけの運賃といいますか収益で、新たに事業を展開していくというのは、私はもう限界に来ているのではないかというふうに思っております。

そういった意味で鉄道会社のまねをして、沿線の開発とか、そういうことに取りかかれる人材というのを甘木鉄道のほうに入れていかないといけないのではないかと、なかなか人を入れるというのは非常に勇気が要りますし、コストもかかることですから、難しいのではないかと思いますけれども、ただ生き残るために変わっていくといいますか、そういったために、そういった観点から、私はそういった人材をOBでも結構ですし、そういった方を入れていって、収益がもっと上がって、新たな事業展開ができるような体制にもっていくべきではないかというふうに思っておりますが、これにつきまして、そういった人材を入れていったらどうかということについてはいかがでしょうか。

○議長（浅尾静二君） 市長。

○市長（森田俊介君） 甘木鉄道の営業方針というのは、あくまでも株式会社甘木鉄道で判断することでありますから、この席でどうこうということを申し上げる筋合いはございません。

ただ、一応、私が社長を兼務しておるという観点から申し上げますならば、今、中島議員が言われる話、それはもつともであります。

しかし、残念ながら、現在、御存じのように甘木鉄道の、いわゆる株主の形態、株式の形態、その他考えたときに、民間事業が、民間業者が、例えば借り入れてその大きな事業をすると、それだけのリスクが負えるのかということ考えた場合、おのずとそこには限度があるのかなと、だからできる範囲のことについては、今の甘木鉄道株式会社のできる範囲の中ではやりますけれども、じゃあ、民間の鉄道会社がやっているような大きなことができるのかというと、やっぱり限界があるのかなというふうに思っています。

○議長（浅尾静二君） 10番中島秀樹議員。

○10番（中島秀樹君） 大変難しい部分があるというのは私も重々わかります。

しかし、何とかやはり頑張っていたいただきたいといいますか、チャレンジしていただきたいというふうに思っております。

確かに人を雇うということは資金が要って、リスクを負わないといけないというお話が、今、市長のほうからございましたけれども、そしたら例えば民間にいる有識者の知恵をかりるとか、何とかそういった形でできないかなというふうに思っております。

そうしないと、なかなか発展性がないのではないかと、私が甘鉄に乗りまして、筑前町の駅にとまると、三輪それりを見ますと、こういったふうに朝倉市もなったらいいかと、ここまでベッドタウンの波が来てるんだよなあと、あとちょっと来たらいいんじゃないかというふうに私は思うんです。

そういった意味では、鉄道の沿線、ですから馬田あたり、ここら辺を民間の業者とコラボをして開発をしていって、ベッドタウン化をするということは可能ではないかなというふうに考えているんですが、これについて民間業者とそういった住宅開発をすると、こういう考え方についてはいかがでしょうか。

○議長（浅尾静二君） 市長。

○市長（森田俊介君） ただいまお話がありました三輪それりについても、これは西鉄だったと思います。民間業者です。

そういうことであるならば、私どもも十分民間業者、他の業者と協力し合いながらやるということは可能であるし、大いにやっていかなきゃならんことだろうというふうに思っています。

現実には、例えば、これはある私鉄っちゃ、もう私鉄は1つしかないけえわかるかもしれませんが、そこのある部門あたりについては、まずは自分ところの沿線の開発をちょっと、時代的にちょっと遅いなと思うところもあるんですけども、もっと早くやるべきやないかと、やったんかと思うとがありますけれども、そういう姿勢も見せている会社もございますので、そういったところと、やはりお互いに協力し合ってやるということについては、今後も考えていかなきゃならんことだろうというふうに思っています。

○議長（浅尾静二君） 10番中島秀樹議員。

○10番（中島秀樹君） ぜひとも協力しまして、そういった開発というのは、民間の力をかりながらやっていくというのは、一つの知恵ではないかというふうに思いますので、話が出ましたらぜひとも進めていただきたいというふうに思っております。

では、3番目です。

やはり働く場所というのは大事です。ただ、大規模な企業というのは、昔に比べたらなくなってきたというか、難しくなったというふうに思っております。

企業誘致といえば、ブリジストンとか、キリンビールとか、朝倉市は輝かしい歴史を持っているわけです。企業誘致といえば大規模な製造業というのを思い浮かべますけれども、今は製造業はグローバルな競争が避けられずに、国内で基幹工場を長期にわたって維持す

るのはやはり難しくなっているというふうに思っております。

また、仮に誘致ができて、どここの工場が今度どここの市で撤退するとかいうように、長く誘致をするというのは難しくなった、難しい時代になったというふうに思っております。

そういった中で、私は中小企業をたくさん誘致する、そういったのがいいのではないかとこのように思っております。

ホームランを打つのではなく、ヒットをこつこつ打っていくような、そういった動きとこのように必要ではないかとこのように思っております。

中小企業の誘致につきましては、今どんなぐあいになっていきますか、お尋ねいたします。

○議長（浅尾静二君） 商工観光課長。

○商工観光課長（森部秀二君） 誘致する企業は、リスクの大きい大企業より中小企業のほうがよいのではないかとこのように御質問ですが、近年の進出企業の要望、条件、それから朝倉市の受け入れ環境について、若干御説明申し上げます。

進出を考えております企業の多くには、すぐにでも工場建設に着手したいという要望がありますので、農振除外ですとか、農地転用に時間を要する農地ではなく、工業団地や工場跡地など、既に造成されている土地を求める傾向にあります。

朝倉市におきましては、現在、工業団地は杷木の林田工業団地の1区画、約7,700平米、工場跡地といたしましては福田のローム跡地、約5万平米などの民間適地があります。

それから、先ほど議員が言われましたように、最近では土地問題のほかに労働力確保の問題が大きくなってきております。景気の緩やかな回復に伴いまして、企業の労働力不足が深刻化してきております。

進出を考えております企業にとっては、土地代や労働者の賃金が都市部に比べて安い地方は魅力であります、一方では工場を建てても人が集まらないというジレンマも抱えております。

このようなことから、土地代が安く労働者を集めやすい地域が、進出企業が求めている条件であるというふうに言われております。

朝倉市といたしましては、このような状況を十分認識した上で、これまでどおり企業規模の大小にかかわらず、情報収集に努め、根気強く企業を誘致していきたいと考えております。以上です。

○議長（浅尾静二君） 10番中島秀樹議員。

○10番（中島秀樹君） 企業誘致をするに当たって、企業側はそこに進出をしたら本当に人が集まるのだろうかという心配がある。朝倉市に行ったら本当に集まるのだろうか、そしたら企業もちょっと躊躇をして、少々土地が高いけれども、やっぱり苧田町に行こうとか、これ例えですけれども、そういったふうになっているのかなと、そういう意味では、やっぱり負のスパイラルと言ったらちょっと言葉が強いですけれども、そういったこと

にならないように、やはりその連鎖を、私は切っていくといけないというふうに思っているんです。

そういった中で中小企業に対して、やはり市として、それこそ民間とタッグを組んで中小企業を育てていく、たくさん朝倉市内にも中小企業がありますので、そういったことも必要ではないかというふうに思っております。

なかなか進出をする例がないとすれば、そういった中小企業を育てていると、タッグを組んでやりましたとか、そういったことってというのはやっているんでしょうか、お尋ねします。

○議長（浅尾静二君） 商工観光課長。

○商工観光課長（森部秀二君） 地元企業の育成につきましては、各種事業資金の融資制度ですとか、ことし7月から設置しております朝倉よろず経営相談窓口、それから商工会議所及び商工会に対する支援などを通じまして、地元企業の育成を行っている状況があります。

それから、産業政策マネージャーを中心といたしまして、地元企業との連絡を密にしながら施設の集積ですとか、増設の相談などにも誠意を持って対応しているところです。以上です。

○議長（浅尾静二君） 10番中島秀樹議員。

○10番（中島秀樹君） 方針といいますか、考え方はよくわかったんですけども、具体的に、じゃあ、こういったのがありますかそういったものは、企業進出にしても、それから中小企業支援にしても、産業マネージャーもいらっしゃるということですので、そういったものというのではないんでしょうか、お尋ねします。

○議長（浅尾静二君） 市長。

○市長（森田俊介君） まず、幾つかの問題点、指摘をなされました。

まず、企業の支援というあり方ですけども、どちらかというと従来の行政のいわゆる中小企業を含めた支援については、どうも延命策みたいな支援のあり方が主流である。これは朝倉市に限らずどの自治体も。

しかし、本当にそれでいいのだろうか、例えばAという企業が非常に業績不振だと、その原因は何かと、1に経営者にかかっている場合が多いそうです。経営者の考え方、やり方。しかし、その場合、そのことは問わずに、融資だけをして延命をするということだとどまっておるんじゃないかという指摘がございます、そういうふうな。

本来ですと、あんた、経営者かわりなさいと、ぐらいのことまで突っ込んでやないと、本当の意味での企業再生とかにはならないんじゃない。

だから、そこらあたりの方は、行政としてやっぱり考えていかなきゃならん問題が1つあるのかなと、それともう一つは、それとあわせて起業支援、これも重要なことです。

ものの統計によりますと、会社、株式か何か、要するに会社と言われるものは、30年た

ちますとその85%はもうなくなっておるそうです。それはいろんな会社がありますから、それも含めてですけど、ということは新陳代謝が比較的激しいということでありますから、ということは新しい起業に対する支援をどうやっていくかと、これも行政、苦手な側面でありますけど、これもやっぱりやっていかなきゃならん、力を入れていくべきだというふうに思っています。

それと、具体的な例で言いますと、地元のある具体的には申し上げ、漠然と申しますと製造会社、いろんな、いろんな技術がいいところらしいです。そこが非常に業績がいいということで、今、何カ所かに分かれている、これは朝倉市外もそうですけれども、朝倉市と朝倉市外に分かれている工場を一つに、大きいところをしたいということで相談に見えましたので、それについてはきちっと土地の確保、それから地元住民の方も了解をいただいた上で土地を確保して、そちらのほうに新しい大きな工場を建築していただくというふうな世話もしております。

ほかにもありますけれども、長くなりますのでここらあたりで終わりますけれども、そういう形で今進めておるということでもあります。

○議長（浅尾静二君） 10番中島秀樹議員。

○10番（中島秀樹君） 市長のほうから具体的な企業の名前は言えないということでしたけど、私も確かその企業は存じております。

3つ工場がありまして、それを集約すると、これなんかまさに中小企業支援のある意味ベストプラクティスといいますか、3つばらばらに工場があるよりは、1つのところでやったほうが企業としても効率がいいわけですから、いい、そういったアドバイスをこれからしていったら、私はやはり朝倉市と企業がともに育っていくと、そういった動きが必要ではないかというふうに思っております。

足による投票というのを私は先ほど申し上げましたけれども、それはやはり人は経済的な魅力とか、それから都市の魅力、そういったもので人は動くと思うんです。

富が大きく生まれるところに向かって人は歩いて行くというのが、私は一般的だというふうに思っておりますので、朝倉市の富がふえれば、人口もおのずと私がついてくるのではないかと、そういった意味では、やはり経済のことを考えないと地域再生の方策というのは不可能ではないかと、経済原則にのっとって地域再生というのはやっていかないといけないのではないかとというふうに思っております。

人口がふえればサービス業もふえていきますし、サービス業がふえれば先ほど言いましたように若者の雇用もふえる。

今、若者はほとんど第3次産業のほうに、サービス業におりますので、人口維持は、私は絶対大事じゃないかなというふうに思っております。

午前の質問の中に、これ4番目の質問に移るんですけれども、朝倉市の魅力度ランキングが11位から9位になったということを少し。私もそれは聞いておったんですが、本当に

9位なのかなというのが実感でございます。9位だったら、もっと人が来てもいいんじゃないかなというふうに思っております。

ただ、9位というのは紛れもない事実ですので、そういった9位という魅力をもっともっと私は伸ばしたほうがいいんじゃないかなというふうに思っております。

私が調べましたところ、居住を考える上で重視する点ということで、50代、60代の人は医療、福祉施設の充実と、歩いてすぐそばに病院があるとかいうのを重視するそうです。

そういった意味では、朝倉市というのは先ほど副市長からの説明にもありました、いやいや部長でしたかね、部長からの説明、答弁にもありましたように、そういった魅力にあふれているのかなというふうに思っております。

朝倉市は、もともとコンパクトシティの要素を持ってるんじゃないかなというふうに思っております。

福岡市はコンパクトシティの物すごくわかりやすい例だと思うんです。空港もそばにありますし、町も小ちゃくて買い物するところも集積しています。

ああいうイメージで朝倉市もやっていったらいいのではないかと、朝倉市のコンパクトシティの魅力をもっともっと伸ばしていったらいいのではないかとというふうに私は思っております。

そういった意味で朝倉市の魅力、住みやすさランキングの9位になった魅力で、しかも先ほど申しましたように強いところをさらに伸ばす、そういった意味では、どういったところをこれから伸ばしていけば人口流入が進む、加速するというふうに、副市長、お考えでしょうか、お尋ねいたします。

○議長（浅尾静二君） 副市長。

○副市長（堀内善文君） 市民の方が住居をどこに選ぶかという一番のきっかけになるのは、結婚のときかなというふうに思っております。

そして、じゃあ、結婚するとき、普通でしたら今までの生活習慣というのは、親と一緒に生活するというのがずうっと従前の生活でございましたが、今は結婚したら親と別に住むのが今は主流になってきております。

そのときに、自分がそういう世代だったらと思うんですが、やはり子どもを育てるとか、結婚の次に見えてきまして、そうすると保育料ですとか、病気ですとか学校関係、そういうことに近いところとか、そういうことがあろうと思います。

ですので、魅力を上げる手段は、たくさんいろんな15項目ございましたけど、その中で特にしなければならないと私どもが今思っているのは、そういう住居を構えるときの人たち、ターゲットを誰に絞るかとしましたときに、やはり結婚を考えてある方が一番の対象かなと思っております。

朝倉市に住んである方は、アパート、借家の方、それから持ち家の方でございますが、一般的に持ち家の方は土地、建物がございまして、ある程度はその地に根づいたといいま

すか、住まれる方が多いじゃないだろうかという形で、どうしてもやっぱり新しいきっかけをつくるようなとき、ところを、そこがまず第一のターゲットで、そこに力を入れるものでいろんな子育て政策、それから住居政策、そういうのが必要じゃないだろうかと思っておるところでございます。

○議長（浅尾静二君） 10番中島秀樹議員。

○10番（中島秀樹君） 住居を構えるとき、結婚のときというのが例が出ましたけど、では私は副市長のお考えを聞きまして思いますが、結婚するときに、今は若い人たちが結婚したら多分、立石とか頼田とか、モータリゼーションといいますか、車を使って、町からちょっと離れているけれども、そういったところのアパートに住むというようなのが多いのではないかとこのように想像しております。

それを、私は民間と、やはり先ほど、同じことになってしまうんですけども、協力をして若い人たちが町なかに住めるような、俗に言う賃貸物件といいますか、そういったものが中心部には私は少ないような気がしますので、そういったものをふやしていくような、そういった動きというのを市として民間と共同して、金融用語ではフォワード・ガイダンスというんですけども、行政のほうはこういった政策をやっていきますよと、こういったことを望んでますよというのを流して行って、それに誘導していくというんですかね、そういったやり方でもできるというふうに思っているのですが、中心部に賃貸住宅をふやしていくというのはできないでしょうか、お尋ねいたします。

○議長（浅尾静二君） 副市長。

○副市長（堀内善文君） 民間と一緒にするということは、なかなか難しいところでございます、市ができるというのはいろんな規制、例えば用途地域の見直しでそういう住宅が建てられるような環境を整えるとか、そういうことは1つのことだろうと思えます。

また、午前中の質問でもございました322号線のクランク解消に伴いますまちづくりというのがございますが、そういうところの中でも単純に道路を通すだけではなくて、住宅が建てられるような環境づくりのまちづくりをするという形での、市街化地域での賃貸住宅の促進の1つにはなるんではなかろうかと思っております。

○議長（浅尾静二君） 10番中島秀樹議員。

○10番（中島秀樹君） やはり若い人たちに住んでもらう、残ってもらおうというのが大事だというふうに私は思っております。

「母になるなら流山市」といって、千葉県だったと思いますが、千葉県の流山市なんですけれども、ここはこのフレーズで人口を16%ふやしてるんです。

ぜひとも市の職員の皆さんにホームページを見ていただきたいんですけども、何かやる気にあふれていると言ったら変なんですけど、おもしろいのは、部長が一人一人、「私はことしこれをやります」という、ホームページに出してるんです。

そして、やはり「母になるなら流山市」というぐらいに、やはり子育てのことに物すごく重点を当ててやってるようですので、私は何か参考になるのではないかなというふうに思っています。

ただ、そういったやはり先ほど言いましたように、不毛かもしれませんけれども、そういった取り合いのやはり競争をしていかないと、朝倉市というのは人口が減っていきまじし、特にやはり若い女性というのは出ていってしまったら、その次の世代の子どもさんが確実にいなくなると思いますか、朝倉市では生まれなくなってしまうわけですから、絶対にキーマンですので、押さえないといけない人だと思いますので、重点的にやっていただきたいと思っております。

副市長、流山市のホームページっていうのを、ごらんになったことがありますでしょうか。

○議長（浅尾静二君） 副市長。

○副市長（堀内善文君） いえ、済みません、見ておりません。

○議長（浅尾静二君） 10番中島秀樹議員。

○10番（中島秀樹君） ぜひとも見ていただくと、何か非常にデザインもいいし、いいなあというふうに思いますので、ごらんになっていただければというふうに思っております。

では、次に、中小企業の支援とかいうのを言いましたけれども、やはり企業誘致というのは難しい、そう簡単にできるものではありません。

そういった中で、観光をやっていくというのが、私はいいのではないかなというふうに思っております。

観光産業というのは、若い女性が就業しやすい形態だというふうに言われております。それによって、経済効果によって若い女性たちが潤う、職を得ることができるということになってきます。

観光振興については、朝倉市は今どんな状態でしょうか、お尋ねいたします。

○議長（浅尾静二君） 商工観光課長。

○商工観光課長（森部秀二君） 観光振興の現状ということですが、これは平成27年度が最新のデータになりますが、観光入込客数、これが315万2,000人、前年度から18万5,000人増加しております。

これは昨年度、地方創生事業に伴います旅行券割引の事業、これは全国的に行われておりまして、福岡県朝倉市におきましても同様の助成事業を行った結果によるものと考えております。

この宿泊助成事業で実施しましたアンケート調査によりますと、約7割が60歳代以上の方で占められているという結果が出ております。

調査をしていない日帰り客を含めた高齢者の割合、やや下がるものとは考えられますが、それでも大半が子育てを終えた世代であることは容易に推測できます。

このような状況を踏まえまして、交流人口の増加策といたしましては、割合の低かった

若者世代をターゲットにした取り組みを行っております。

例えば、平成24年度から行っております福岡女学院大学との連携事業、若者向けの観光ルートの提案ですとか、イベント時のPR活動に取り組んでまいりました。

それから、平成26年度から住宅展示場でも活動を行いました。定住を考えている世代に対しまして、朝倉市をPRしているところです。

昨年度からは、まだ試行錯誤の段階ではありますが、スイーツをテーマにした集客イベントなども実施しております。以上です。

○議長（浅尾静二君） 10番中島秀樹議員。

○10番（中島秀樹君） 私、福岡市、天神に行くときに、高速で行きましたらば天神北でおられるんですけども、その前に港が見えるわけです。そこに大きな旅客船がとまって、こんな大きい船がやっぱり来てるんだなと思って、やはり先ほど言いましたようにベッドタウンではないですけども、福岡市、アジアの玄関口として、インバウンドのお客様というのはたくさん、福岡には来てると思うんです。国立博物館ぐらいまでは多分たくさん来てると思うんですけど、そのインバウンドの需要というのは、私は絶対に取り込まないといけない層だというふうに思ってるんです。

そのインバウンド需要を取り込むということにつきましては、朝倉市としてはどうしますでしょうか、お尋ねします。

○議長（浅尾静二君） 商工観光課長。

○商工観光課長（森部秀二君） インバウンドを取り込む施策はということですけども、昨年度、平成27年度、観光パンフレット、以前は日本語版しかなかったものを英語版の作成をいたしております。

それから、観光ポイントに、外国人旅行客がよく利用されておりますジャパントラベルガイドアプリがありますので、それを利用しやすいように、フリーWi-Fiのスポットを設置する事業を今進めておる段階です。以上です。

○議長（浅尾静二君） 10番中島秀樹議員。

○10番（中島秀樹君） フリーWi-Fiとかを整備いたしまして、Wi-Fiを使ってお客様を誘致するんでしょうけど、インバウンドにおいて朝倉市の売りといいますか、やはり何か売りがないと来ていただけないと思うんです。

そういった意味で朝倉市の魅力といいますか、売りというのは何だというふうにお考えでしょうか、お尋ねいたします。

○議長（浅尾静二君） 商工観光課長。

○商工観光課長（森部秀二君） 朝倉市の観光を語りますときに、やはり秋月を初めとします歴史施設があります。歴史の要所がありますので、歴史と文化を合わせたところの観光というものを売りにして振興をしておるところです。以上です。

○議長（浅尾静二君） 10番中島秀樹議員。

○10番（中島秀樹君） 時間も迫ってきましたので、では、済みません、最後に7番の人口減少を前提とした政策も必要ではないかということをお話をさせていただきたいと思います。

これにつきましては、あんまり実は話したくない話なんですけれども、この本をたくさん読みましたらば、結局、各市町村は競い合って人の奪い合いをするわけです。そこには当然勝者もあれば敗者もある、全員勝っていたら日本の人口は倍になってしまうらしいです、数字の上だけですが。

ですから、当然負けることもあるわけ、しかも人の流れは大都市のほうにどんどん人が流れていってますので、人、もの、金に余裕がない小規模自治体が、大都市に対抗して若者の流出に歯どめをかけるのは並大抵のことではないという悲観的な論調もあります。かなりの数あります。

ですから、下山の思想といいますか、山を下るときの思想みたいなのも必要ではないかというような論調のもかなりありました。アクセルが必要なときもあるけれども、ブレーキを踏むのも大切ではないかと、そういった論調があります。

その中で、自治体のターミナルケア、終末期医療、そういった考え方も出てまいりました。結局、一生懸命頑張ったけれども負けてしまって、やはり人口減少に歯どめがかからなくなったときは、そういった場合も自治体として想定しておくべきだというようなことが書いてありました。

私もそういうふうにはなりたくないんですけれども、でもやはりある意味、私は勝負に打って出るというふうを考えておりますので、政策立案において、次善の策や不測の事態でのリスクを最小限に抑えた計画、これコンティンジェンシープランというそうなんですけれども、不測の事態が起きたときは、検討は政策立案においては不可欠なはずだと、時にはあえて悲観的に考えることも大事ですというふうに書いてありました。

戦う前から負けのことを言うなんてとんでもないとお叱りを受けるかもしれませんが、でもそれくらい朝倉市の人口が減っておりまして、仮に5万人を切るようなことになった場合には、容易では私はないというふうに思っています。

そういった中で出ていた考え方につきまして、できるだけ体力を整えて支出を減らすと、そういった考え方が出てまいりました。新たなインフラ投資はしないと、それが懸命であると、そういった論調も出てきております。

非常に厳しい見方かもしれませんが、でも最悪のことを考えたらば体力を温存しておく、それも1つの考え方ではないかと思えます。

新たなインフラ投資はしないとというのは、何を言っておるんだというふうにお叱りを受けるかもしれませんが、でもこういった考え方もあります。

これについてはいかががお考えでしょうか、お尋ねいたします。

○議長（浅尾静二君） 総合政策課長。

○総合政策課長（石井清治君） 公共施設並びにインフラ資産ということでございます。

まず、総合政策課のほうで、市のほうは6月の議会で承認をいただきました公共施設等総合管理計画というのを、今、立てております。10年スパンということで。

ここについて、これから先、昭和の40年、50年にいろんなインフラあるいは公共施設の整備がされております。これがちょうど大規模改修、更新改修の時期に当たっております。

このことを将来にわたって向こう10年間、さらにはその向こうにわたって平準化を図っていこうということで、今、計画を策定しており、さらに細部にわたっての施設については個別施設計画に基づいて、今、議員が言われます集中して予算が、あるいはお金が必要な時期を平準化しようというところで、今現在、進んでおるところでございます。以上です。

○議長（浅尾静二君） 10番中島秀樹議員。

○10番（中島秀樹君） 私は朝倉市が負け組になるとは思ってはおりません。

先ほど言いましたように地の利もありますし、非常に有利な、やり方によっては絶対に私は勝ち残れるというふうに思っております。

ただ、1つだけ皆様に御理解いただきたいのは、冷めた頭と熱い心、クールヘッドとウォームハート、これは絶対必要だというふうに思っております。

そういった意味で、やり方を1つ間違えると負け組になってしまう可能性は十分にありますよと、それだけ競争は熾烈なんですよと、それだけは肝に銘じて、私たちも朝倉市の人口政策、それから財政見通し、ここら辺を見ていかないといけないのではないかというふうに思っております。

以上で私の質問を終わらせていただきます。ありがとうございました。

○議長（浅尾静二君） 10番中島秀樹議員の質問は終わりました。

10分間休憩いたします。

午後1時57分休憩